

石狩川中・下流における農村の変容

巡検趣旨

石狩川中・下流域はかつての開拓期は泥炭地、低湿地のため開墾は困難を極めたが、石狩川の水運を利用しての開発が着目され、開拓初期の樺戸集治監の囚人による開墾・道路開削が端緒として知られる。戦後は篠津原野の泥炭地開発で道内有数の水田単作地帯となった。しかし1972年以降の減反により、地域によっては野菜、畑作のほか札幌都市圏や千歳空港を利用しての道外出荷を指向する花卉、果菜などの近郊型農業の発展もみられ、また札幌都市圏の拡大により宅地化、観光地化(リゾート開発)が進められている地域もある。今回の巡検はおもに石狩川右岸の当別町、月形町、浦臼町の農村を中心にこうした地域変容をみることを目的とした。

なお、この記録は自然の部分は大内定、南空知の農業については進藤賢一、住宅団地と新篠津の農業については山下克彦が分担した。

巡検地域の自然

巡検地域は主として浦臼町、月形町、新篠津村、当別町にわたる石狩川下流の右岸地域である。夕張山地と増毛山地との間の谷を埋積した石狩川下流は典型的な蛇行河川として知られるが、昭和初期から戦後の大規模な捷水路と築堤工事により、流路は約100kmも短縮された。河谷平野部の沖積層は、ほぼ20~40m程度であるが、表層は新篠津村を中心に層厚8m、厚いところで10mを超える泥炭層(草炭質)が堆積し、低湿地のため戦後の篠津原野の大規模開発まで、開拓では取り残された地域であった。

現在、大小の河跡湖(三日月湖)、旧流路跡が残るが、大正期初めより、戦後、1981年の石狩湾(石狩新港内)への石狩川新放水路完成まで実に30回ほどの氾濫を記録している。奈良部(1950年)の研究では、大規模低気圧に伴う不連続線通過が洪水の原因の半数程度を占め、台風の通過・接近、融雪によるものも多く、また石狩川下流部では支流河川の増水よりも数時間から十数時間の遅れで

増水のピークがあり、雨が上がってからの急激な増水といった心配もある。築堤が進んだ現在では支流の中小河川の内水氾濫の危険性がより大きい。

右岸側の増毛山地の東縁部、いわゆる樺戸山地(最高点1100mの丘陵性山地)からは、浦臼町から月形にかけて中小の扇状地が複合扇状地状に石狩川右岸に張り出し、末端は石狩川に切れ段化しているものが多い。札比内、札的内、浦臼の各扇状地では扇央から扇端にかけて戦後水田開発が行われたが、各扇頂付近を連ねる山麓地域では畑作、牧草地域である。

なお、鶴沼付近一帯の扇状地には、扇状地を横断する、ほぼ石狩川流路方向に活断層を含む撓曲構造が指摘され(活断層研究会、1980年)、その後の調査(飯塚、1982年)では一帯の扇状地下面に石狩川河岸段丘が少なくとも2段伏在し、最終氷期末の段丘形成後、撓曲構造を境とする樺戸山地の相対的な隆起および寒冷化による扇状地性堆積物の増加により、扇状地の張り出し・河岸段丘面への被覆化が進んだと推定されている。

札幌市北郊の新興住宅団地

—あいの里とスウェーデンヒル

あいの里団地は市の北限にあり、面積は378haである。入居開始より9年が経過し、一般住宅地の分譲はほぼ完売である。拓北地区を含む1990年のセンサスでは4,102世帯、人口は13,999人を数える。過去5年間の人口増加率は市の統計区内では最も高く、2.14倍である。

住宅都市整備公団が開発した道内唯一の団地で、しかも学園を取り込んだ公団団地としては、全国最初である。すでに医療専門学校や拓北高校をはじめ、94年4月にはあいの里西小学校も開設されている。また読売新聞北海道新館のほか、商業施設では生協が立地し、学園通りを中心に商店の新規開店も見られる。

当初の計画と異なる現象としては中高層住宅が福移通の北に増加したことと、飲食店を含め、商業施設が団地内の主要路線沿いに拡散する傾向が

あることである。

スウェーデンヒルは当別町西当別の丘陵地にある170戸の団地で、うち居住者は58戸、170人である。当初は会社別荘地として分譲されていたが、札幌大橋の開通で、札幌へのアクセスが改善されたため、常住人口が増加している。名称が示す通りスウェーデンハウスを中心とする木質住宅からなる。質の高い住環境を維持するために、建物の高さ、色、配置などに関する建築協定をもとに街づくりが進められている。また団地は住宅のみで、利便施設は一切ない。団地中央にはスウェーデン交流センターがあり、同国の芸術家によるガラスや木材技術の普及をめざす工房がある。

米から、花卉・ブドウなどへの変貌

一南空知の農業

空知支庁は「米どころ」がこれまでの評価であった。勿論、今日まで専業農家と第一種兼業農家を合わせた主業農家率は84%と全道平均を上まわり、農家の71%は「米」をメジャークロップとしている。

しかし、労働力の高齢化、離農者の増加、農地価格の下落、賃貸借地の増大などの情勢変化の中で、稲作内容も変わり、転作環境の中に新たな局面が出ている。

米の品種は、かつての耐寒性のものから、アミローズ（でんぷん）が少なく、アミグラム（粘性）の強い米になりつつある。「いしかり」、「ともゆたか」から「ゆきひかり」、「きらら」の作付が増え、品質改良が進んでいるほか、機械化に伴い、稚苗植から中・成植が主力になりつつある。米の転作は、91年の42%から93年の26%、そして94年にはさらに低下が見込まれるが、減反期間の転作作物が農業経営のなかに定着し、産地特化している部門に玉ねぎや葉菜、花卉などがあげられる。

岩見沢の玉ねぎは、道内の三大産地の一つ、丘珠地区を越え、富良野に並ぶ躍進をしており、「花の町」月形町のカスミソウやカーネーションの切花出荷額は年産12億円に達する。

南空知から石狩北部で、花卉栽培が本格化したのは70年代である。米価が下降し、減反、転作で麦類、豆類栽培で農繁期が重なり、冬は出稼ぎを余儀なくされる状況からの脱却手段として、花と

野菜が登場する。花は反収が60-70万円（野菜40万円）で、軽い、秤にかける必要がないなどの理由が花を優先させた。花卉市場も冠婚葬祭用「菊」から、贈答用、お見舞い、会議場やTV局の装飾用として全国に開けた。

切花の出荷範囲は、札幌圏よりも東京など三大都市圏や九州に広がり、空輸が一般的になった。石狩当別で、早朝8時に箱詰めすれば、午前10-11時に千歳空港、午後4時には福岡についてしまう。輸送費は12kg箱で福岡が2,700円、東京が1,300円とそう高くない。7-10月は本州の花卉の端境期、従って南空知の花卉は6-11月に出荷すべく生産の時期調整をしている。宿根カスミソウ、トルコギキョウ、スターチス、カーネーション、カノコユリ、サンダソニアなど数10種類に及ぶし、市場価格も1本500-1万円と幅がある。

浦臼町の醸造用原料ブドウは、93年で85ha、この面積は契約ブドウ生産地としては道内最大である。

「鶴沼ワイナリー」が大半で、この農場は小樽市の「北海道ワインKK」と契約しているほか、「サントリー・ワインKK」との契約が10戸、5ha程度ある。鶴沼の丘陵地帯（開析扇状地）に原料ブドウ産地が立地したのは74年の「北海道果樹モデル団地設置事業」がきっかけで、総事業費の1/2に当たる2,300万円の補助金が引金となった。

町長の友成氏、「北海道ワインKK」の葛村社長、「鶴沼ワイナリー」の今村社長の三氏のトロイカ路線で、11haの農地に棚造り、苗植などでブドウ畑をつくり、その後78年、国の「農地開発促進事業」の適用を受け、100haの売渡しを受けた。

現在80haがブドウ栽培地で、その半分が「ミューラートルガウ種」、残り40%が「ツバイゲルトレーベ種」と「セーベル種」、他にドイツから輸入した10数種の原料ブドウ苗木を植えている。「北海道ワインKK」は、基本的には原料名を製品名とする立場をとっているため、ブドウ栽培技術の良否がワインの品種に決定的に重要とする立場を堅持している。

新篠津地区の農業の変化 一米から蔬菜へ

この地区は戦後開発事業の目玉の一つとされた泥炭地開発により、畑地より水田化が著しく発展

した地区である。低平な村内の標高差は7 mで、村の中央部には65年に掘削が完了した篠津運河がはしり、排水幹線の役割をはたしている。村の水田面積は4,745ha（92年）で、一戸当り9.8haと全道一で、全国では秋田県大潟村につぐ規模である。米の反収は520kg前後と支庁平均に近いが、海風の影響を受ける南部と北部で相違がある。

最近の水田の老朽化が目だち、排水や漏水のため、土地改良が行われ、新たな農家負担となっている。転作の麦や小豆、大豆にかわって作付が増加しているのが、野菜と花卉で92年の農協販売額の15%を占める。

野菜は従来玉ねぎに加えて、泥炭地に適しているとされる「葉もの」の白菜、キャベツのほか、ハウスを利用した水耕栽培による育苗を行っている軟白長ネギは特産品となっており、野菜生産額の約20%を占める。花卉は高倉地区を中心にブルーファンタジアやアストロメリアなどの栽培がみられ札幌市場への出荷が中心である。